

# 知里幸恵「日記」におけるキアスムスの使用

——アイヌの心性に起因する修辞技法が日本語構文に  
浸透した事例として

大喜多 紀明

## 1. はじめに

江戸末期以降、アイヌ語は急速に衰退した。このことについて上野は次のように述べた。<sup>★1</sup>

アイヌ語の母語話者が減少した背景には、歴史的な要因が大きく関わっている。江戸時代後半からの松前藩および幕府の蝦夷地経営や明治時代以降の北海道開拓が大きく関与している。

二〇〇九年にはアイヌ語は「極めて深刻」な危機言語に位置付けられた。同時に、アイヌ語を母語としていた人たちのほとんどが、事実上の、アイヌ語と日本語の二重話者となった。こうして生じた二重話者による日本語の音声テキストにおける音律・語彙・語法など

の特徴については小野<sup>★2</sup>、菅<sup>★3</sup>、丹菊<sup>★4</sup>などが報告した。そもそも音声そのものは極めて揮発性が高い。当時、希少とみられかつ高齡化していたアイヌ語話者の音声テキストや、話者が駆使する日本語音声テキストを記録することの学術的緊急性があつたことについてはあらためて確認するまでもない。<sup>★5</sup>一方、筆記資料は、音声に比べると揮発性は低い。だが、このことが、当該資料的価値を決定するものではない。アイヌ日本語二重話者が日本語により筆記した文書に関する研究は、むしろそれほど注目されてきたとはいえず、音声テキストほど資料収集がおこなわれてきたとはいえない。かつ、当該筆記資料に関する分析が十全に実施されてきたともいえない。

ところで、アイヌ口承テキスト（つまり音声に基づくテキスト）にはしばしばキアスムス（chiasmus）構造がみとめられる。<sup>★6</sup>こうした音声に基づくテキストにおける当該構造の出現は、口承といわれるいわゆる一連の文芸的資料のみにとめられるものではない。

[Note]

Ohgita Noriaki

The use of chiasmus in the “diary” of Yuki

Chiri : As an example of distinctive Ainu

rhetorical techniques permeating into

Japanese syntax

(Received 15 March 2024)

A Noon of Liberal Arts, No. 13, 2025

例えば、アイヌ話者におけるアイヌ語談話テキストにおいても当該構造が頻用されてきた。<sup>★7</sup>さらに、アイヌ語日本語二重話者が駆使する日本語による談話テキストや筆記テキスト<sup>★9</sup><sup>★10</sup>においても、当該構造の使用がみとめられることが確認された。

一方、一般的な日本語では、談話や筆記テキストにおいて、キアスムスの使用が構文上に頻繁にみとめられることを示した報告はない。ここで、本稿では、非アイヌである日本人の構文では、キアスムスの使用がさほど一般的ではないということを議論の前提とすることにする。

大喜多は、アイヌ話者のアイヌ語構文におけるキアスムスの使用が、アイヌ民族の心性に基づいていること、かつ、アイヌ語日本語二重話者が駆使する日本語にキアスムス構造が出現した理由が、構文構造への、アイヌの心性の浸透によるとの仮説を提示した。<sup>★11</sup>本稿の目的は、かかる仮説の蓋然性を検証するところにある。なお、本稿では、アイヌである知里幸恵（以下、本稿では「知里」と呼ぶ）の筆記テキストである日記を分析することによる検証を実施することにする。知里は一九〇三年に生まれたアイヌ民族の女性であり、アイヌ語と日本語の二重話者である。<sup>★12</sup>

## 2. キアスムス

McCoy は、キアスムスが古代文学や弁論などでしばしば使用される構造であることを次のように述べた。<sup>★13</sup>

Chiasmus (or chiasm) is an important structural device/form commonly found in ancient literature and oratory, both secular and sacred.

キアスムスは、一般的には、二組以上の同義的あるいは対義的に対応する単語、フレーズ、または構文の単位間で、下記のような反転構造を持つ形式を指す。

A ↓ B ↓ … ↓ (X) ↓ … ↓ B' ↓ A'

ここで、Xはキアスムスの構造上の中央に配置された対応を持たない要素を指すのであるが、キアスムスによつては、かかるXを持つ場合と持たない場合がある。

単語レベルのキアスムスの事例としては、例えば、渡辺はシェイクスピアのソネット一一九番の三行目「Applying ① fears to ② hopes, and ② hopes to ① fears」(下線と丸数字は筆者による)がキアスムスであることを指摘した。<sup>★14</sup>この場合、下記のような図式が成立する。

① fears

② hopes

② hopes

① fears

つまり、①と①が対を構成し、②と②が対を構成することにより、要素の対が同心円状に配列している。こうした、二組以上の対が同心円状に配列した構造を本稿では「キアスムス」と呼ぶことにする。なお、キアスムスを構成する①と①のような要素の対を、本稿では「要素対」と呼ぶことにする。

なお、松村は、キアスムスが出現する文体事象の分野を網羅的に紹介した<sup>★15</sup>。松村が示した分野は、聖書学、西洋古典学、メソポタミア、ウガリット、ゲルマン、キリスト教、イラン、アラブ、中国、日本、ハリイポッターに関するものである。ここで、日本に関連し松村が紹介した文献は、大林<sup>★16</sup>やマセ<sup>★17</sup>による古事記と大喜多によるアイヌ口承についてであり、一般の日本語による、個人的に筆記した日記や談話などにキアスムスがみとめられたことを示すものではない。

一方、キアスムスとは異なり、構造上の前半と後半の配列が反転せず、並列状に配列した構造を、本稿では「パラリズム」と呼ぶことにする。

A ↓ B ( ↓ ・ ・ ・ ↓ N ) ↓ A ↓ B ( ↓ ・ ・ ・ ↓ N )

ここで、パラリズムを構成する要素の対についても、本稿では「要素対」と呼ぶことにする。例えば、吉川は、旧約聖書のイザヤ書一

章三節のパラリズムを紹介した。<sup>★19</sup>

Ein Ochse kennt seinen Herrn  
und ein Esel die Krippe seines Herrn.  
牛は飼い主を知り  
ろばは主人の飼い葉桶を知っている。

aber Israel kennt's nicht,  
und mein Volk verminnt's nicht.  
しかし、イスラエルは知らず  
わたしの民は見分けない。  
『イザヤ書』一：三

ここでの一行目と二行目、三行目と四行目はそれぞれ並列状に配列しておりパラリズムである。

### 3. 先行研究

アイヌ語を母語とする話者のアイヌ語による談話にキアスムスがみとめられることを示した先行研究には以下のものがある。

#### ◆ 談話テキスト (アイヌ語)

- 鳩沢ワテケの発話 (日常会話) <sup>★20</sup>
- 鳩沢ふじのの発話 (挨拶口上) <sup>★21</sup>
- 平賀サダモの発話 (日常会話) <sup>★23</sup>
- 二谷善之助の発話 (挨拶口上) <sup>★24</sup>

ここで、平賀サダモの発話（日常会話）にみとめられるキアスムスを例示することにする。まずは平賀サダモの発話部分の引用である。<sup>★25</sup>なお、原文は田村の資料に掲載されたものであり、<sup>★26</sup>引用文中のアルファベットおよび下線は筆者によるものである。

「ええ。それから今日、今から、**A**あなたは行つて本当に、病人を（あなたは手、手…）マッサージなりととして、**B**病人がその病気がよくなつて、そのこと、であなたが厚遇され、**C**「このように生かしてくれてありがとうよ」と、**C**本当によく感謝されるように、一所懸命になつて、**B**病人を、よく治すようにと、神様にも守護を祈つて、**A**いい具合にマッサージなりとも、しようと思いなさい！」

この引用部分に対するキアスムスは下記の通りである。<sup>★27</sup>

- A** あなたは行つて本当に、病人を（あなたは手、手…）マッサージなりととして
- B** 病人がその病気がよくなつて
- C** 「このように生かしてくれてありがとうよ」
- C** 本当によく感謝されるように
- B** 病人を、よく治すようにと、神様にも守護を祈つて
- A** いい具合にマッサージなりと

このキアスムスでは、**A**と**A'**は「マッサージ」が、**B**と**B'**は「病人の治癒」が、**C**と**C'**は「感謝」がそれぞれテーマになっており対応関係にあることがわかる。なお、アイヌ語には文字がないため、アイヌ話者によるアイヌ語の筆記テキストは存在しない。<sup>★28</sup>アイヌ語日本語二重話者が駆使する日本語構文をキアスムスの観点から調査した先行研究には以下に示すものがある。

#### ◆談話テキスト〈日本語〉

黒川セツの発話<sup>★29</sup>

萱野茂の発話<sup>★30</sup>

杉村滴の発話<sup>★31</sup>

#### ◆筆記テキスト〈日本語〉

知里幸恵の『アイヌ神謡集』に掲載された「序」<sup>★32</sup>

知里幸恵の日記<sup>★33</sup>

以上の先行研究によれば、検証したすべてのアイヌ語日本語二重話者の日本語談話テキストおよび日本語筆記テキストにおいてキアスムスの使用がみとめられた。<sup>★34</sup>なお、こうした一連の報告は、あくまでも当該修辭技法の使用がみとめられたことを示す知見の紹介が主たる目的である。つまり、当該構文におけるキアスムスが出現する頻度や要件、あるいは話者（筆記者）の個性差などがどうであるかが検証されることにより明らかになつたわけではない。かつ、検証された事例数についても、決して十分な分量であるとはいえない。

とりわけ、本稿で検証する対象は筆記テキストのなかでも知里の日記なのであるが、本稿にとつての直接の先行研究<sup>★35</sup>で分析されたものは、『銀のしずく…知里幸恵遺稿』<sup>★36</sup>に記載された合計五四日分の日記（日付のみの日にちを含めれば五五日分）の内のわずか最初の三日分にすぎず、残りは未検証である。以上をふまえ、本稿の目的は、当該日記における未検証部分の六日分の分析をおこなうことにより、当該修辭技法の使用の頻度を検証し、アイヌ語日本語二重語者が駆使する筆記された日本語構文において、キアスムスが使用される蓋然性の評価をおこなうところにある。

#### 4. テキスト

『銀のしずく…知里幸恵遺稿』に掲載された日記のなかでも最初の三日分に相当する一九二二年（大正十一年）六月一日、六月二日、六月三日の日記は既に検証されている。本稿では、この三日分の日記に引き続く六月四日<sup>★39</sup>、六月五日<sup>★40</sup>、六月六日<sup>★41</sup>、六月七日<sup>★42</sup>、六月八日<sup>★43</sup>、六月九日の日記をテキストとする。以下は、当該箇所<sup>★45</sup>の引用である。なお、引用文には、筆者による下線とアルファベットが付されている。

#### ◆テキスト①

六月四日 日曜日

A 七日のうち一日……遊ぶことをわすれて……真志保の声かき

こえる様。B 一切を忘れて神様に祈つて、懺悔し、感謝し、心のうちを神様に訴へる……あゝ何といふ尊い事であらう。私は「聖書が欲しい、教会へゆきたい——」それを抑えてたゞ祈る。神様よ、私が何かしてほんとうに一寸の心になれます様に。C 奥様は昨夜はよくねむれたと、はれ／＼したお顔を見せて下さったので嬉しかった。

いゝお天気、青葉に輝く日の光、ほんとうに明るい日。こゝちよいそよ風が今日始めて着換へた単衣の袖をはらふ。（十時頃）C 旭川ではもう日曜学校を終つたらう。親、兄弟、親類、知己、一人々々の顔が目の前にうかぶ。父様の病氣はなほつたか知ら。種々な種類の美しく咲き揃つた花を売りにあるく人が面白い声で花歌をうたふ。

B' やはり私には教会が懐かしい。神様のお話がききたい。讚美歌を歌ひたい。祈りしたい。不信仰な私は聖書を忘れて来たのだ……罪人。

先生に教へられて本郷教会へ行く……大きくない教会だけど、あまり人の少いのちよつと驚かされた。十二人の来会者のうち真面目に話をきく人が何人あるのかしら。若い青年がコクリ／＼とるねむりをし、若い女があくびの出しつゞけ。オルガンを弾く女の人は居ねむりを我慢しきれないでみつともない様子をする……。私には今夜きいたお話が何だかわからなかった。

今私の頭に、胸に、何の印象も残つてゐない。

A' 杉原大尉を思ひ出す……杉原先生のお話がききたい。真砂町

に小隊があるから……とたしかに仰つたのを覚えてゐるが、わからなくて困る。心からシツクリと私の心に合ふお話がきつたい。杉原先生を恵み給へ。

D 奥様が坊ちゃんと嬢ちゃんを一しょにお湯へ連れて行きなすつたので、頭がぐらつくくと仰る……何卒今宵も安らかな眠りが彼の人の上に訪れます様に……。

E 先生が仰る。私が一つ of の原稿を書くにもこんなに苦しんで書く。誰にもその苦しみは認めては貰へないけれども、それでもいゝかげんにサラ／＼と書く事が出来ないかと仰る……お、何といふ尊い事であらう。何だか知ら、私は涙が出さうに先生の人格に敬服する……。苦しんで苦しんで出来した物を人はちつとも知つてくれないのに、それでも苦しまずには書けない……。私は心の中にそれを繰り返し繰返す。

F お伽噺を読むと、私も天真爛漫な子供になつてしまふ……。坊ちゃんに読んできかせて上げて、また寝るまで読んだ。グリムのお伽噺。

G 先生の原稿が出来上つた。何んなに先生は御安心でせう。苦しんで／＼の賜のよろこび……G 尊いよろこびぢやありませんか。私もほんとに嬉しかった。

F おきくさんはほんとにかはいらしい人、私はつく／＼思つた……縫いかけの単衣を頭からかぶつてねむつてるおきくさんの側でお伽噺の本を読みながらつく／＼思つた。もう十一時近いだらう。今日もこれで終る。

E おや／＼先生はこれからまだおしごとがあるんですつて。明日の下調べ……。D 私には寝ようと思つたが何だか勿体なくなつて寝られない。H 何を売るのが知らないが、毎晩悲しい音の笛を吹きながら通る人がある……きつとたいぶ年をとつたお爺さんなんだらう。あの笛の音をきくと何だかさういふ気がしてならない。

東京の物売りは實際面白い。豆腐屋がアウ／＼と何か気の狂つた小僧さんの様な声を出して私を驚かして、わざ／＼おもてへ飛出させたりしたつて。

今日はおうちでフロックスの花を買つた。花を見ると、お父つあんが思出されて仕様がなない。

I 万年筆が何うしたのか、インクが両方から漏り出して困るのでも赤いきりで繃帯してやつたが、それでも漏つて困つた。I 先生がかはいらしい万年筆を貸して下すつた。此の私のは今度直す所へやつて下さるとのお話、H 東京の商人はずるくて、地方へは悪いものを持つてゆくのだと云ふお話もきいた。

「たい商人といふものは何うしてさう利慾にばかり偏るのか知ら……今夜の牧師さんのお話もさういふのらしかつた。富めるもの、神の国に入るは如何に難いかな。神様の委託物である富を、神様の聖旨にかなう様に使はねばならぬ。富を得る為に悪い事をしたりする人は富を神の賜だと思はないから……自分の労力の代償だと思ふから……。ではその労力は何処から来る、其の代償は何処から来る。見よ、空の鳥はつむがず耕さずして

而も豊かに日を暮してゐるではないか、といふおはなしであったのだ。私たちは何もさう、ちつぽけな智恵をしぼつて富なる物を得ようとして脱線したりしなくとも、神様は、たゞ信頼し身も魂も任せてる者には、毎日のなくてはならぬものは必ずあたへ給う、と。富があたへられたら神の為に……私は、何を持つてゐるだらう。

### ◆テキスト②

六月五日 いゝお天気

J 赤ちゃんにひつかかれながら庭であそぶ。おさなごはほんとうに正直です。赤ちゃんは私が嫌いなんでももの。

K 英語を教える。知らない事を覚えてゆくたのしみは非常に大きな物。

L 旭川の母様からお手紙をいただいた。

森長操さんといふ方が私と友達になりたいとの事、何だか困つた事のように思ふ……。私に今まで友達といふものが真にあつたであらうか。知里さん、幸恵さん、どうぞ永久に御交際を……さう云つて下すつた人たちは今何処の空に暮してゐるのか、それさへ私にはわからない。L 私が東京へ来た、お友達に知らせやうと思つた事いまだ一度もない。私にまごゝろがないからか。

K' 真志保が運動会で一等を得たと云ふ。嬉しい事。何卒私の真志保がからだに魂に頭に、強健があたへられますように……。

豊栄の運動会、今年はいつともより大人も小供も服装が立派になつ

たといふ。何卒服装ばかりでなく、愛する兄弟よ、すべてに眼を開いて下さい。

J' 久方振りで聖書を見て私は喜ぶ。やはり私は神の子、常に神にそむいてゐながら、やつぱり神様を思ひ出づる。神を仰ぎたくなる。

聖言葉がききたい。

### ◆テキスト③

六月六日

M 朝、聖書を読む。

我やすらかにして臥しまたねむらん。エホバよ、我を独にてたひらかに居らしむるものは汝なり。

N 昨日、奥様に拝借した平民の福音を読む。

人に親切をする事、それは非常にいゝ事である。だけどただ親切をするといふ美名を着るのみなら何にならう。親切は、ほんとうの心から、心の底から起る愛の発現ではないか。相手の人の心と自分の心が同じになつて、はじめて、自分の心が自分のからだを動かして働く……美しい事、尊い事。

O お昼はお汁粉、おいしかった。英語はだんぐむづかしくなつて来た。何うしてかう覚えが悪いか。でも、あせらなくつたつていゝ。考えればわかるのだから……。もう少し敏捷に頭が働けばよいと思ふけれど自業自得か。それともこれが私に相応つた頭であらう。勉強々々、何だか後から〜追はれる様な気が

する。いそがしい事だ。

O' お母様に手紙を書いてみると、坊ちやまが見えて、歌をうたふやら、面白い事ばかりきかして下すつたのでお腹の皮がよれる程笑つた。坊ちやまの頭はいたい何処に際限があるのだらう。私はたゞ驚くより外なかつた。

N' 真志保にも手紙を書いた。今頃はお母様も真子も富子もスヤ／＼とねむつてるに違ひない。

お母様がいやな夢を見たから晧別にきつと何か変つた事があるに違ひないといふお手紙、ハテ、何だらう。フチはかはいさうに、何んなに私の事を心配してめて下さるのでせう。たゞ一途に私をかはゆくて／＼呑んでも足らないのだ。

M' おゝ、別れの時の光景が目の前に浮ぶ。フチたちよ、父母よ、兄弟よ、御身たちの健康を祈る。私はあなたたちの為の為に何のいゝ事をしたであらう。これからも何を為し得るであらう。寧ろ心配をかける事の方が多くなるのではないか。神様、私を導きたまへ、私に最もよきところへ。今日は一寸雨が降つた。

#### ◆テキスト④

六月七日 朝

P 悪に敵するなかれ。人汝の右の頬をうたば亦外のほゝもめぐらしてこれにむけよ。

人汝に一里の公役を強なば、これとともに二里行け。汝に求めるものには予へ、借らんとする者をしりぞくるなかれ。

汝等の敵を愛み、汝等を誣ふ者を祝し、汝等を憎む者をよこし、なやめせしむる者のために祈祷せよ、神の子とならん為に……天の父が日を善者にも悪者にもてらし、雨を義き者にも義からざるものにも降らせ給へり。(馬太五・三九—四六)

此の故に天に在す汝等の父の完全きが如く汝等も完全くすべし。我汝の指のわぎなる天をみ、なんぢの設けたまへる月と星とを見るに、世の人はいかなるものなればこれを聖心にとめたまふや、人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや。

たゞすこしく人を神よりも卑くつくりて栄と尊きとをかうぶらせ、またこれにみ手のわぎを治めしめ万の物をその足の下におきたまへり。

すべてのうし、羊、また野のけもの、そらの鳥、うみの魚、もろ／＼の海路を通ふものまで皆しかなせり。

われらの主エホバよ、なんじのみなは地にあまねくして尊きかな。(詩九〔原文ママ〕・三一—九)

神様は絶対公平の愛なのだ。私は広大無辺の宇宙を思ふ時にさう思ふ。そして、また最も小さい小さい虫を見ても草花を見てもさう思ふ。名もない草花、垣根の隅の小さな苔でも時が来れば花ひらき種を残して枯れてゆくではないか。神様がそれを彼にあたへ給ふて、彼の此の世の天職としたまふた。そしてかの小さい花は何の不平も持たぬではないか。彼等はそれでいゝのだ。太陽、星を支配したまふ神様はまたかく最小さきものをも些の乱れなく支配したまふ。

Q お父様の手紙、お父様がさういふ事をお書きなさらうとは夢にも思はなかつた。

——人間は何が苦しいと云つて、不快な程不幸な事はないであらうと思ふ。其身も将来家を営む上に充分注意を要するべく、其身世間のおかげで勉強して大な智慧袋に一ぱい智慧をつめこんでも、不健全な身体を持ち、不愉快な日を送る様では、何にも知らずに日々荷ナワを背負つて薪木を拾ふ人、わらびをとつて市に売る人々の方が何程幸福であるかわからぬのである。私の心配する処は其所にあるのですから、必ず／＼注意すべきであります——。然り。お父様よ、其の通りで御座います。健康は実に人間の幸福の源であります。R 健康な人は日々の仕事も楽しく快くキパ／＼やつてのけるでせう。思ふがまゝに其のからだを動かして、夫の為、親の為、子の為、人の為につくすでせう。お、健康！何といふいゝ物でせう。私はすべての人が何ぞ此の健康を得る様にと望みます。そして、私もそれが欲しう御座います。S ですけど如何にせん、私には健康がありません。私の生命の源泉である心臓が不健全なのです。一秒々々ちつともやすまずに湧出づる血潮をせきとめるかたい弁があるのです。T しかもその障碍物は私の心臓から取去る事は出来ない、一生出来ない。それも私には無くてはならぬものだから……一度硬くなつたそれは再びもとのようにはならないのであらう……。T では私は、一生涯不健全な身体で、日々鬱々と不快な時を過ぎねばならないかしら……。お、それではあまりに不幸

ではないか。神様は私の罪の償に健康を取上げ給ふた。S しかし神様は私を愛したまう……愛の鞭。病苦をあたへ給ふて私を鍊りそして、心の健康をとらしめ給ふのだ。心に安心歓喜をあたへ給ふたのだ。R 私の心に悪魔が働く。私はもし充分な健康を持つてゐるならば、私は必ずやそれを無上のほこりとして、神を忘れ、世の人を忘れて己のためのみの人間になつてしまふであらう。神様よ感謝します。私は弱い身も魂も神様にまかせてさへていたゞきますから、安心があり歓喜があります。

Q 何卒お父様御安心下さいませ。P 私はかうして神の愛をさとりましたから。世の同病者の為に心から祈る心が起る。人に健康を失はせまいといふ努力を心からする事が出来る。私は病苦を通して神様からかういふ賜をいたゞいたのだ。私の身は神に任せ、よろこびと感謝にみちた愛の笑顔を持つて人に接しませう。

#### ◆テキスト⑤

六月八日 木曜日

U なんぢ施済をする時、右の手の為すことを左の手に知らずする事なかれ。かくするは、其の施済のかくれん為なり。然ば、かくれたるに見給ふ汝の父は明顯に報ひたまふべし。(太〔原文マ〕六・三一五)

かくれたるに見たまふ父、かくれたるに在す神、お、見るものなしとて罪を犯す私の愚さよ。何うしたらいいだらう。人さへみなければ、何かのかけにさへ身をおけば、何かで身をおほ

ふてしまへば、それで自分はおかされてゐるのだと思ふ、何といふ馬鹿者でせう……私は……。

かくれたるに見たまふ神、かくれたるに在す神。

しみくひ、さびくさり、ぬすびとがちてぬすむ所の地に財をた

くはふる事なかれ。しみくひ、さびくさり、ぬすびとがちて

ぬすまざるころの天に財をたくはふべし。(太六・十九―二二)

そは、なんぢらの財のあるところに心もまたあるべければなり。

ほんとうに、地上のたから……金を持つ人は金に心を奪はれる。

身の外形のみに飾りをつける事に腐心して肝心の心をるすにす  
るんですもの。

人は二人の主仕ふる事能はず。

なんぢら神と財に兼つかふる事あたはず。(太六・二四)

此の事についてえらい人の話をききたい。杉原先生のおはなし  
をききたい。

是故に汝らにつげん、生命のために何を食ひ、何をのみ、また

からだのために何をきんと思ひわづらふ事なかれ。生命は糧よ

りまさり、からだは衣よりもまされるものならずや。空の鳥を

見よ。まく事なく、かる事せず、倉にたくはふる事なし。然る

になんぢらの天の父はこれを養ひたまへり。

馬太伝六章には、何とまあいろく々な事があるのでせう。私の

浅い知識で解せない所は多々ある。何卒教へて下さる人を与へ

られます様に……。

神エホバよねがはくはかれらにおそれをおこさしめたまへ。もろ

くくの国人におのれたゞ人なる事を知らしめ給へ。(詩九二〇)

おのれたゞ人なる事を私は時々忘れる……。此の廣大無辺なる

宇宙を見よ。極細少から最大の物まで皆一つの運命をもつてゐ

るではないか。深山の奥にある一つの苔も此の家の土台の際の

小さい草も、みんなおなじく時がくれば花をひらく……春夏秋

冬、世はみんな一定の法則のもとに刻一刻、ちつともかはらず

に動いてゆくではないか。神様の力は何処まであるか、それを見

て量知る事が何うして出来よう。大きな力、無限の力、無始  
のはじめから無終の終まで、大きいものから小さいものまで一  
貫してはたらく其の力、それこそは神様ではないか。

あゝ何と云つたらいいかわからない。

たゞありがたい。

V夕食後、平民の福音からはじまつて先生に宗教談をうかがつ  
た。私は何だかしら何もかも解決がついた様な気がしてたゞ嬉

しい。

U'おつるさんといふ人のおはなし。はじめは感心し、羨望し、

驚愕し、同情し、おしまひには何だか何もわからなくなつてし

まった。

大病人の看護を打捨て、おいて、自分の霊の糧を得るために、

何時間も費す、それで自分は義しいのだと主張する……それで

いゝのか知ら……。自分の満足のために人を犠牲にする、それ

が宗教の最高なものか。私はわからない。一杯の水を人にあた

へても、それはその人にあたへたのではなくてエス様に上げる

事なのだと思つたではないか。人に至誠を持つて仕へる、それがすなはち神様に仕へるわけではないか。自分をすてて人につくす、だから十字架が尊いのではないか。

V' あゝ私はまとめて今夜のお話と感想を書つらねる事は出来ない。

たゞし何となしに重い心が急に軽くなつた様な気がする。

### ◆テキスト⑥

六月九日

W 偽善者よ、先づ己の目より梁木をとれ、さらば兄弟の目より物屑を取るやう明かに見べし。(太七・五)

X 偽善者とは私の事、X' ほんとうに私の事。

W' 夕方、奥様のお供をして散歩に出かける。夜、赤ちゃんがたいへんお泣きなさる。何うしたのでせう。

### 5. 構造

本節では、前節で示したテキスト①～⑥の構造を、筆者が付した下線およびアルファベットにしたがい分析する。

### ◆テキスト①

テキスト①に付した記号にしたがつて作成した図式を以下に示す。

#### 図①・A

A 懐かしい人物の回想…真志保

B 旭川の教会への追慕

C 顔の情景…奥様(現実)

C' 顔の情景…旭川の人たち(想像)

B' 旭川の教会への追慕

A' 懐かしい人物の回想…杉原先生

#### 図①・B

D 睡眠…奥様

E 先生の仕事への姿勢…知里の敬服

F 眠り…坊ちゃん

お伽噺…知里による読み聞かせ

G 喜び…先生

G' 喜び…知里

F' 眠り…おきくさん

お伽噺…知里が読む

E' 先生の仕事への姿勢…知里の驚き

D' 睡眠…知里

#### 図①・C

H 商人…面白い

物の意味…父を想起

I 万年筆…故障

I' 万年筆…拝借

H' 商人…ずるい

物の意味…神の祝福

まず、図①・Aについてである。Aでは、故郷にいたる真志保（知里の弟）を回想している。それに対し、A'では、同じく故郷の杉原先生を回想している。双方は、「懐かしい人物の回想」がテーマである。Bには、教会に行つて一心に祈りたいという知里の意思が表示されている。それに対し、B'では、旭川の教会が懐かしく、東京の本郷教会を紹介されて行つたが雰囲気があわなかつたことが書かれている。つまり、双方は、「旭川の教会への追慕」がテーマである。Cには、奥様の晴れやかな顔について描かれている。それに対し、C'には、旭川の人たち一人ひとりの顔が目の前にうかぶことが書かれている。ここで、Cの顔は現実の顔であり、C'の顔は想像であるという違いがあるが、双方は「顔の情景」がテーマである。以上のように、AとA'、BとB'、CとC'は、それぞれ要素対を構成している。かつ、かかる一連の要素対は同心円状に配列しているので、図①・Aで表示された範囲はキアスムスである。

続いて図①・Bについてである。Dでは、坊ちゃんと嬢ちゃんを風呂に連れて行つたことにより奥様は頭がふらつく状態となつたため、知里は、奥様が安眠できることを願う様子が書かれている。対

し、D'では、眠るつもりだったのが眠れなくなつた知里自身の様子が書かれている。つまり、Dでは奥様でありD'は知里自身という違いはあるが双方は「睡眠」がテーマである。Eには、先生の仕事の姿勢に知里が敬服していることが書かれている。また、E'においても、先生の仕事はまだあることへの知里の驚きが書かれている。つまり、EとE'はともに「先生の仕事への姿勢」がテーマである。Fでは、知里が坊ちゃんに、坊ちゃんが眠るまでお伽噺を読み聞かせている。対し、F'では、眠っているおきくさんのそばで知里がお伽噺を読んでいる。つまり、ここでのテーマは「眠り」と「お伽噺」である。Gには、原稿ができあがつた先生の喜びが書かれている。一方のG'にはそれを見る知里の喜びが述べられている。つまり、喜ぶ人物は異なるが、双方のテーマは「喜び」である。以上のように、DとD'、EとE'、FとF'、GとG'はそれぞれ要素対を構成しており、かつ、同心円状に配列しているため、当該構造はキアスムスである。

最後に、図①・Cについてである。Hでは、知里は、豆腐屋を例示し、東京の物売りがおもしろいことを述べた。そのうえで、花を見ることで父親を思い出したことが書かれている。対し、H'では、東京の商人がずるいことを述べたうえで、聖書に記された物に対する考え方を披歴している。つまり、HとH'はともに商人と物の意味をテーマとしている。Iには、知里の万年筆が故障した様子が述べられている。対し、I'には、その代わりとして先生から万年筆を拝借したことが書かれている。つまり、双方のテーマは「万年筆」である。以上のように、HとH'とIとI'はそれぞれ要素対を構成し

ており、かつ、同心円状に配列している。よって、当該範囲はキアスムスである。

以上より、テキスト①は三つのキアスムスによって構成されている。

#### ◆テキスト②

続いて、テキスト②において、記号にしたがった図式を作成した。

#### 図②

- J 背く子ども…知里と赤ちゃん
- K 成長…知里の英語
- L 通知…母からの手紙
- L' 通知…友人への連絡
- K' 成長…真志保の心身
- J' 背く子ども…神と知里

Jでは、知里が赤ちゃんからひつかかれながらも世話をしている様子が述べられている。対し、J'では、神に背きながらも神を思い出すことから、知里自身が神の子であることが述べられている。つまりJで述べられた知里を嫌う赤ちゃんはJ'における神に背く知里と対応しており、双方のテーマは「背く子ども」である。Kには、知里が英語の学びを開始したことが記されている。対し、K'には、真志保が健やかに成長することの知里の願望が書かれている。つまり、

KとK'は「成長」がテーマである。Lには、知里が母から手紙を受け取った様子が述べられている。それに対し、L'には知里が友人に連絡をしていないことが述べられている。つまり、双方は「通知」の有無がテーマである。以上より、JとJ'、KとK'、LとL'という三組の要素対が同心円状に配列していることから、テキスト②はキアスムスである。

#### ◆テキスト③

テキスト③は下記の図式となる。

#### 図③

- M 神への信託…聖書
- N 愛の発現…理念
- O 明晰さ…知里
- O' 明晰さ…坊ちやま
- N' 愛の発現…現実
- M' 神への信託…現実

Mでは、知里は聖書を根拠に人間が神に委ねるべき存在であることに言及した。それに対し、M'では、知里自身が神に導かれることを願った。つまり双方のテーマは「神への信託」である。Nにおいては、人に親切にすることの根源が心の底から起こる愛の発現であることが理念として述べられている。それに対し、N'では、故郷の人たち

の親切が現実の愛の発現に基づいていることが述べられている。つまり、NとN'のテーマは「愛の発現」である。Oには、知里自身の英語学習に困難があることが述べられている。一方のO'には、お坊ちやまが利発であることが述べられている。このように、双方のテーマは頭の「明晰さ」である。したがって、MとM'、NとN'、OとO'という三組の要素対は同心円状に配列している。よって、当該範囲はキアスムスである。

#### ◆テキスト④

以下はテキスト④の図式である。

#### 図④

- P 神の愛・聖書  
 Q 父の心配・手紙  
 R 健康への願望・ある  
 S 身体の不健康・現実  
 T 一生涯・障害物を取り去れない  
 T' 一生涯・健康を取り去られた  
 S' 身体の不健康・心の健康  
 R' 健康への願望・ない  
 Q' 父の心配・払拭  
 P' 神の愛・生活実践

Pでは、聖書に述べられた神の愛に言及している。対し、P'では、かかる神の愛を生活化することが述べられている。双方は「神の愛」がテーマである。Qでは、知里の父が知里を心配する手紙が引用されている。対し、Q'には父の心配が不要であることを知里が述べられている。つまり、双方は「父の心配」がテーマである。Rでは、知里が健康を望んでいることが書かれている。それに対し、R'では、仮に知里が健康であれば神と人とを忘れてしまうので、むしろ健康であることを望まないことが書かれている。つまり、双方は「健康への願望」がテーマであり、その有無が述べられている。Sには、知里の現実の不健康の様子が書かれている。対し、S'では、たとえ身体が不健康であったとしても、精神面においてはむしろ健康が与えられたことが書かれている。このように、SとS'は「身体の不健康」がテーマである。TとT'はともに「一生涯」がテーマである。Tには、障害物を取り去れないことが一生涯続くであろうこと、T'には、健康を取り去られた状態が一生涯続くであろうことが述べられている。TとT'はともに「一生涯」がテーマである。つまり、テキスト④は、PとP'、QとQ'、RとR'、SとS'、TとT'という五組の要素対によって構成されている。かつ、かかる一連の要素対は同心円状に配列している。当該構造はキアスムスである。

#### ◆テキスト⑤

以下はテキスト⑤の図式である。

図⑤

U 信仰のあり方…聖書

V 心の変化…解決する

U' 信仰のあり方…証言

V' 心の変化…軽くなる

Uでは、聖書の文言が記されることにより、信仰のあり方が提示されている。また、U'では、おつるさんの実体験に基づく証言により信仰のあり方が述べられている。かかる両者は「信仰のあり方」がテーマである。Vでは、知里の何らかの内心の問題が解決に導かれたことが述べられている。また、V'では、知里は、「重い心が急に軽くなった」ような気がする」と述べた。双方は、「心の変化」がテーマである。つまり、UとU'、VとV'は並列状に配列しているといえるので当該範囲はパラリズムである。

◆テキスト⑥

以下は、テキスト⑥の図式である。

図⑥

W 他者への判断の困難さ…聖書

X 自己評価…偽善者

X' 自己評価…偽善者

W' 他者への判断の困難さ…赤ちゃん

Wでは、他者への指摘の前に自己の視点を改めるべきであるという意味の聖書の文言が紹介されている。一方、W'では、赤ちゃんが泣く理由を知里が理解できないことが述べられている。双方とも、「他者への判断の困難さ」がテーマである。Xでは、Wで述べた偽善者が他ならぬ知里自身であることが記されている。X'では、「偽善者とは」が「ほんとうに」に置換されているのであるが、事実上、Xの繰り返しである。双方は「自己評価」がテーマである。WとW'、XとX'は同心円状に配列しているので、テキスト⑥はキアスムスである。

以上の、テキスト①～⑥の分析をおこなった結果をまとめると次表のようになる。なお、次表では、テキストの種類（項目…テキスト）、テキストから導き出された図（項目…図）、各テキストがいくつの要素対によつて構成されているか（項目…要素対の組数）、構造が何に類別できるか（項目…種別）が記されている。

テキスト	図	要素対の組数	構造の種別
①	図①・A	3	キアスムス
①	図①・B	4	キアスムス
①	図①・C	2	キアスムス
②	図②	3	キアスムス
③	図③	3	キアスムス

④	図④	5	キアスムス
⑤	図⑤	2	パラレリズム
⑥	図⑥	2	キアスムス

このように、テキスト①、②、③、④、⑥はキアスムスであり、テキスト⑤はパラレリズムである。したがい、本テキストにおいてはキアスムスがみとめられやすいことを示す知見であるといえる。大喜多(2013c)が示した三日分の日記がキアスムスであることと併せ、本稿の知見は、当該日記におけるキアスムスの使用の頻度の高さを示すものである。よつて、本稿は、アイヌ語日本語二重話者による、筆記日本語構文にキアスムスが表出する蓋然性が高いことを支持するとともに、構文レベルでのアイヌの心性に基づく修辭構造の浸透を示唆する知見であるといえる。

## 6. おわりに

本稿の前提は、キアスムスの出現が、アイヌの心性に一因するといふものである。本稿において知里の六編の日記の構造を調査したところ、合計五編の日記がキアスムス構造であった。知里はアイヌ語日本語二重話者であるところから、本稿の知見は、アイヌ語日本語二重話者の日本語筆記構文においてキアスムスの使用の蓋然性の高さをみとめる実例であった。また、以上は、構文レベルにおける、アイヌの心性に基づく修辭構造の浸透を示唆するものであった。た

だし、本稿では、『銀のしずく…知里幸恵遺稿』に登載された日記の残りの分については未調査である。また、知里の日本語筆記テキストには、他にも当該書籍に掲載された手紙もある。知里以外を筆者とするテキストを含め、筆者としては今後、同様の検証をおこなうつもりである。

ここで、本稿では一編の日記においては、キアスムスではなく、パラレリズムにより構成されていることが確認できた。かかるパラレリズムは、キアスムスと同様に対称性に富んだ構造である。こうしたアイヌ語話者の構文におけるパラレリズムの出現については、例えば、アイヌの子守歌の構造においてもみとめられた。<sup>★46</sup>かかるパラレリズムの使用も、他のアイヌ語日本語二重話者の日本語筆記構文にもみられるかについては今後調査をおこなう予定である。

註

- ★1 上野昌之「アイヌ語の衰退と復興に関する一考察」『埼玉学園大  
学紀要（人間学部篇）』一一号、二〇一一年、二二四頁。
- ★2 小野米一「アイヌ語話者の日本語北海道方言」『学芸国語国文学』  
二四号、一九九二年、一一五～一二八頁。
- ★3 菅泰雄「アイヌ語話者の日本語北海道方言談話資料」『北海学園  
大学人文論集』二号、一九九四年、四五～八五頁。
- ★4 丹菊逸治「アイヌ語沙流方言と日本語の母音フォルマントの比較  
レポート」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』二卷、一九九九年、  
一三二～一三六頁。
- ★5 都築殖雅「アイヌ語資料収集の緊急性とエスニック・ライブラリー  
の必要性について…北海道・平取町二風谷で学んだこと」『図書  
館雑誌』八二巻三号、一九八八年、一五五～一五七頁。
- ★6 大喜多紀明「アイヌ口承テキストに確認される2種類の修辭配列  
パターンについての資料」『人間生活文化研究』二三号、二〇二三  
年、七七～九六頁。
- ★7 大喜多紀明「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭」『比較民  
俗研究』二七号、二〇一二年、一三三～一四四頁。
- ★8 大喜多紀明「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」  
『ポリグロシア』二三巻、二〇一二年、一二七～一三八頁。
- ★9 大喜多紀明「知里幸恵の文章にみられる修辭技法…アイヌの民俗  
的修辭による影響」『北海道言語文化研究』一一号、二〇一三年、  
九九～一二二頁。
- ★10 大喜多紀明「アイヌ民族による日本語筆記資料についての考察…  
知里幸恵の『アイヌ神謡集』「序」を題材として」『ポリグロシア』  
二四巻、二〇一三年、一九〇～二〇〇頁。
- ★11 大喜多「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」、  
一三七～一三八頁。
- ★12 西成彦「遺された手紙」『立命館言語文化研究』一九巻三号、  
二〇〇八年、八八頁。
- ★13 Brad McCoy, Chiasmus: An Important Structural Device Commonly  
Found in Biblical Literature, *Chapel Theological Seminary Journal* 9, 2003,  
p.18.
- ★14 渡辺秀樹「英詩感情語のメタファーの系譜 第2回 シェイクス  
ピア『ソネット集』のレトリック再考…感情語の類義・反義を中  
心に」『言語文化共同研究プロジェクト』二〇一八号、二〇一九年、  
七～八頁。
- ★15 松村一男「三つの構造…キアスムス、プロップ、レヴィイストロー  
ス」『表現学部紀要』二〇号、二〇二〇年、九一～九三頁。
- ★16 大林太良「異郷訪問譚の構造」『東アジアの王権神話…日本・朝鮮・  
琉球』弘文堂、一九八四年、一四五～一六九頁。
- ★17 マセ・フランソワ「古事記神話の構造」中央公論社、一九八九年。
- ★18 大喜多紀明「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造…異郷訪  
問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』一四号、二〇一六年、  
四五～七二頁。
- ★19 吉川千穂「ユダヤ的メトニミーの実践分析…ネリー・ザックスの  
詩の原理」『独語独文学研究年報』三五号、二〇〇八年、一三三頁。
- ★20 大喜多「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭」、一三三～  
一四四頁。

- ★21 この「鳩沢ふじの」は「鳩沢ワテケ」と同一人物である。つまり、「ふじの」のアイヌ名が「ワテケ」である。
- ★22 大喜多紀明「アイヌの挨拶表現と民俗的修辭構造」『ポリグロシア』二二卷、二〇一二年、一五七～一六五頁。
- ★23 大喜多「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭」、一三三～一四四頁。
- ★24 大喜多「アイヌの挨拶表現と民俗的修辭構造」、一五七～一六五頁。
- ★25 大喜多「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭」、一三三～一四四頁。
- ★26 田村すず子「ワテケさんとサタモさん…沙流方言会話・単語…会話1(1)話」『アイヌ語音声資料』一卷、一九八四年、一二～一七頁。
- ★27 大喜多「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭」、一四二頁。
- ★28 アイヌ語の読みをローマ字で記載した筆記テキストは存在する。
- ★29 同前、一四二～一四三頁。
- ★30 大喜多「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」、二二八～一三二頁。
- ★31 同前、一三一～一三七頁。
- ★32 大喜多「アイヌ民族による日本語筆記資料についての考察…知里幸恵の『アイヌ神話集』「序」を題材として」、一九〇～二〇〇頁。
- ★33 大喜多「知里幸恵の文章にみられる修辭技法…アイヌの民俗的修辭による影響」、九九～一二二頁。
- ★34 本稿では口承文芸を日本語で表記したテキストは検証の対象ではない。
- ★35 同前。
- ★36 知里幸恵『銀のしずく…知里幸恵遺稿』草風館、一九九六年。
- ★37 この日記は、もともとは知里が私的に記したものである。
- ★38 大喜多「知里幸恵の文章にみられる修辭技法…アイヌの民俗的修辭による影響」、九九～一二二頁。
- ★39 本稿ではこのテキストを「テキスト①」と呼ぶことにする。
- ★40 本稿ではこのテキストを「テキスト②」と呼ぶことにする。
- ★41 本稿ではこのテキストを「テキスト③」と呼ぶことにする。
- ★42 本稿ではこのテキストを「テキスト④」と呼ぶことにする。
- ★43 本稿ではこのテキストを「テキスト⑤」と呼ぶことにする。
- ★44 本稿ではこのテキストを「テキスト⑥」と呼ぶことにする。
- ★45 知里「銀のしずく…知里幸恵遺稿」。
- ★46 大喜多紀明「アイヌの子守歌(イヨルイカ)についての考察…心性が継承される直接的なプロセス」『京都民俗』、三〇/三二号、二〇一三年、一四三～一五八頁。

おおきた・のりあき(民俗学・文化人類学)